

# 定家の百番自歌合の選歌態度について

辻 森 秀 英

## 一

「定家卿百番自歌合」は、同書巻頭に、「健保四年二月、撰年來愚歌二百首、結番。同五年六月、更破此番。少々改之。同七年密々經天覽。申請勸判。」とあり、これは「拾遺愚草」上巻「仙洞百首」の奥書に、

「先撰二百首愚歌、聊有結番事、仍可謂拾其遺……」

とあつて、健保四年三月十八日にこれを書くところと相應じているので、何ら疑うところのないものである。「拾遺愚草」の最初の成立はこの年、自歌合より一月遅れてのことであるから、大體整理された作品集から自歌合の歌を選んだのであらうと思われる。「仍可謂拾其遺」という言葉から、この自歌合の作品は最高のものと考えていたらうということが思われる。健保五年には更に改訂を施して、天覧を経、勸判を請うたというのだが、これは許されたかどうか、その判は残されていない。恐らく、最初の歌合を作つた時には、二百首全部が歌集に收められたと思うが、現存の歌合には、家集に見えない歌が六首（註一）ある。これは、健保五

年の改定か、又はその後に改められたか、逆に家集が改められたものと思う。それは次に記すものである。

ふみまよふ山なしの花みちたえて行きさきふかきやへの白雲（内裏詩歌合）

はしたかのとかへる山路こえかねてつれなき色の限をぞみる（内裏詩歌合）

ゆふづくひうつる木葉やしぐれにしさゝ波そむる秋のうら風（内裏詩歌合）

（内裏詩歌合）

松山と契りし人はつれなくて袖こす波にやどる月かげ（和歌所月前戀）

したもゆるなげきのけぶり空に見よいまも野山の秋の夕暮（於北野聖廟詠之）

おさまれるたみのつかさのみつぎ物二たびきくも命なりけり（加任納言參外記廳）

（内裏詩歌合）

「内裏詩歌合」は何年のものか分らない。家集にはこの詞書を持つものが何首もあるが、詩歌合は何回もあつたのでいまのところ明らかでない。

「和歌所月前戀」は歌合では「咽ぶともしらじな心かはらやに我のみけたぬ下のけふりは」に續き「同月前戀」とある。ところが、家集では、「建永元年七月和歌所被忘戀、當座」とあつて「咽ぶとも」があるが、この歌がない。これも、後に、歌合の方が家集の方が改定されたものと思われる。

「加任納言參外記廳」の歌は、「新勅撰集」に、「老の後年久しく沈み待りてはからざる外に官給はりて」の詞書が付いている。定家は安貞元年（六六歳）に民部卿を罷めて正二位に叙せられ、貞永元年（七一歳）に權中納言に任ぜられた。（補任）「二たびきく」というのは、一度現職を離れて再び官職を得たことを示すものであらう。これは遙か後に追加されたものであるから家集になのは當然である。北野聖廟の歌は年代は分らない。この六首を除いた一九四首は全部家集に含まれている。それが家集のどこから出たかを次に示す。

初學百首	養和元年（二〇歳）	三首
二見浦百首	文治二年（二五歳）	一首
閑居百首	文治三年（二六歳）	二首
皇后宮太輔百首	文治三年（二六歳）	三首
重奉和早卒百首	文治五年（二八歳）	四首
無動寺法印百首	文治五年（二八歳）	二首
花月百首	建久元年（二九歳）	六首
一字百首	建久元年（二九歳）	二首
十題百首	建久二年（三〇歳）	二首
伊呂波四十七首和歌	建久二年（三〇歳）	一首

歌合百首 建久四年（三二歳） 六首

百二十八首和歌 建久七年（三五歳） 六首

仁和寺宮五十首 建久九年（三七歳） 九首

院初度百首 正治二年（三九歳） 一四首

仙洞百首（千五百番歌合） 建仁元年（四〇歳） 二二首

院五十首 建仁元年（四〇歳） 五首

院句題五十首 建仁元年（四〇歳） 二首

最勝四天王院障子歌 建永二年（四六歳） 一一首

冬日同詠二十首 建曆二年（五一歳） 四首

内大臣家百首 建保三年（五四歳） 一六首

内裏百首 建保三年（五四歳） 三首

院百首（春日同詠） 建保四年（五五歳） 六首

泥繪御屏風 寛喜元年（六八歳） 一首

關白左大臣家百首 貞永元年（七一歳） 八首

部類歌 四七首

内譯 春 八 夏 一

秋 一〇 冬 四

賀 一 戀 一三

雜 六 無常 三

神祇 一 計 四七

家集に見えない歌 六首

計 二〇〇首

以上のうち、部類歌を除いて百首でないものは、「伊呂波四十七首」「百二十八首和歌」「仁和寺宮五十首」「院五十首」「院句題

五十首」「最勝四天王院障子歌」(四六首)「冬日同詠二十首」「泥繪御屏風」(二首)である。特に歌數が目立っているのは「院初度」の十四首、これは危うく作者から除外されようとして、俊成の奏狀でようやく加えられた時の百首である。定家としては作家としての運命をかけたもので、又、御子左家派の盛衰をも左右するほどのものであつたから、彼としても心血をそそいだ百首で、而も院から特に稱揚されたものであつた。彼の歌人としての評價はほぼこの百首で定まつたといつてよい。「仙洞百首」の「千五百番歌合」は新古今時代最大の歌合であり、「新古今集」編纂最盛期のものであるから、各歌人が力を入れたものであることは當然である。五十歳代の「内大臣家百首」は、自歌合作制時代に最も近いものであるから、これ又當然だと頷かれる。「冬日同詠二十首」から四首は、率としては高いものである。

部類歌(註2)は年代の明らかでないものもあるから除外して、年齢の時代によつて見ると、二十歳代が二十三首、三十歳代が三十八首、四十歳代が三十首、五十歳代が二十九首となる。五十歳代は五十五歳で終つてゐるから、三十、四十、五十年代はほぼ等量と見てよいが、「仁和寺五十首」九首、「院初度百首」十四首、「仙洞百首」二十二首と續く四年間と、「冬日同詠二十首」四首、「内大臣家百首」十六首、と續く四年間が、二つの頂點と考えられる。

「泥繪御屏風」「關白左大臣家百首」は後年改訂したときのものであり、家集にない六首の中の一首も明らかに後年の補修である。

「拾遺愚草員外」は「拾遺愚草」完成後に編集せられたもので最初は無かつたものである。この員外の百首から出てゐるものは「一字百首」の二首、「伊呂波四十七首」の一首、であるが、この三首が何時頃から自歌合に入つてゐたかは容易には解決しかねる。最初、あれ程に自信を以て編成した自歌合に、家集から除いた歌を入れるとは考えられない。これは前の家集にない六首とは事情が違う。作者が明瞭に價値の低いものと永年考えていたものである。「員外」が(註3)天福元年から嘉禎三年の間に成つたものとするならば、それを機會に入れられたものでなからうか。そうすると、「關白左大臣家百首」が加えられた後に又、改修せられたと考えられるのである。

(註1) 風景景次郎氏「新古今時代」には自歌合中の家集非收載歌を三首としてゐる。

(2) 部類歌は分類すると、年代不明一二、正治まで一〇、建仁より承元まで九、建暦より建保まで一三、承久三首になつてゐる。承久年代のものは、承久二年の「住吉歌合」三首で、この歌は後年の補修になる。

後年補修の歌はこれで、承久二年「住吉歌合」三首、貞永元年「關白左大臣家百首」八首、同貞永元年「加任納言參外記應」一首、計一二首になる。それに、年代は建久二年だが、「員外」の「四十七首和歌」中の一首も後年補修と思われるので總計一三首になる。

(3) 「員外」の制作年代は石田吉貞氏は、「拾遺愚草」完成(天福元年)から嘉禎三年までの四年間のことである。

うとされている。(昭和三二年一月號『學苑』同氏論文)と  
 ところで、天福元年という年は現存家集中の歌の年代の  
 最後であるが、恐らく一應の成立建保四年後何回かに亘  
 つて一部分を補修していつたのだろうから、必ずしも天  
 福元年後と見なければならぬこともなからうと思う。  
 然しいまのところそれ以後に明瞭にされるものがない。

## 二

「新古今集」入集歌四十六首の中、十二首が自歌合に取られて  
 いないことは一應注目すべきことではなからうか。「新勅撰集」  
 中の自己の歌は十五首中一首を取っていないだけであり、而もそ  
 の中の一首は「寛喜元年女御入内の屏風」の歌だから、年代的に  
 當然だと思われる。「新勅撰集」と「自歌合」とは略完全に態度  
 が一致していて、二十歳の養和の「初學百首」の一首さえ一致し  
 ているところから見ると、「自歌合」を根底にして歌を選んだと  
 も考えられる。それに反して、「自歌合」は「新古今集」中の自  
 己の作品を全面的に肯定していないことになる。これは「新古今  
 集」の撰者の最後の人が後鳥羽院であつたことにも關係がある。

彼が取らなかつた「新古今集」中の彼の歌を次に列挙する。

- (1) 梅のはな匂ひをうつす袖のうへにのきもる月のかげぞあらそ  
 ふ (秋日院百首・正治二年)
- (2) 霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさにはるさめぞふ  
 る (仁和寺宮五十首・建久九年)
- (3) しらくもの春はかさねて立田山をぐらのみねに花にはふらし

(秋日院百首・正治二年)

(4) タぐれはいづれの雲のなごりとて花たちはなに風のふくらむ

(千五百番歌合・建仁元年)

(5) 見わたせば花もみちもなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

(二見浦百首・文治二年)

(6) さむしろやまつ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

(花月百首・建久元年)

(7) 袖に吹けさぞな旅ねのゆめも見じおもふかたよりかよふら

風 (部類歌・建仁二年)

(8) みやこにも今やころもをうつ山のゆふ霜はらふつたのしたみ

ち (部類歌・元久二年)

(9) とこの霜まぐらの水きえわびぬむすびもおかぬ人のちぎりに

(歌合百首・建久四年)

(10) 春をへてみゆきになるゝ花のかげふりゆく身をばあはれとや

思ふ (部類歌・春)

(11) 嵯峨の山千世のふるみちあととめてまた露わくるもちづきの

駒 (仁和寺宮五十首・建久九年)

(12) 大淀の浦にかりはすみるめだに霞にたえてかへるかりがね

(最勝四天王院・建永二年)

何故にこの十二首を除いたか。その判定は相當困難である。そ  
 れにしても、勅撰集入集作品を除くには、相當の理由があつたも  
 のと考えられる。種類によつて分類すると、春三、夏一、秋二、  
 冬二、戀一、雜三となつている。

歌そのものの價值から考えると、(8)(9)(11)(12)の四首

は調べが澁滞し、愛情の豊かさに缺け、従つて餘情も稀薄になつていて、あまりよい歌とも思われない。(10)は新古今時代の代表になり得る歌だが、内容が齡をとつた定家には、そぐわない感情を持つたかも知れない。(1)から(7)までの歌は華麗さを持つた歌であるが、(7)を除いては、大體として明るく素朴で深い餘情はない。表面的な明るさを厭つたかとも考えられる。

(3)は序を用いただけのもので、深い内容のあるものではない。しかし、浪漫的な感情がほのぼのと立ちのぼつてゐる歌である。(5)は定家若年の歌で三夕の歌とされているが、詠み方は明るく單純である。(6)は多分に物語的で歌の抒情から離れた感のあるものである。それにしても、これらは勅撰集に取られただけあつて、豊かな氣分と花やかさを持つてゐる。それを除いた定家の意圖はやはり考うべきものがある。

### 三

自歌合の歌が含んでゐる時代は、さきの一覽表で示したように三つに分けられると思う。その第一の時代、養和の「初學百首」から、彼が歌壇に頭角を現わすことになつた正治二年の「秋日院百首」に至るまでの時代の歌の選出の態度について先ず考えて見る。

百首歌では、「初學百首」「二見浦百首」「皇后宮大夫百首」「閑居百首」「無動寺法印早卒露瞻百首」「重奉和早卒百首」「花月百首」「十題百首」「歌合百首」「韻歌百二十八首」「仁和寺宮五十首」がこれに屬する。いま、「自歌合」に取つた歌と、取らなかつた歌

を對照して見る。それには全部の歌を掲げるべきであるが、それは到底煩瑣に堪えられないことであるし、紙數の餘裕もないので代表的なものだけを擧げておく他はない。

梅の花した行くみづのかげ見れば句はそでにまづうつりけり  
忘れつるむかしを見つる夢をまた猶おどろかすをぎのうは風  
(二見浦百首)

これらの歌は、描寫的表現で叙景脈のものである。そして、そこには浪漫的な唯美的なものがあつた。所謂「艶」な派手な歌である。この系統の歌はこの百首からは一首も取らず、「新古今集」入集の「見渡せば」の歌や「千載集」に取られた「しぐれつるまやの軒端の程なきにやがてさし入る月の影かな」さえも取らない。この歌は特に叙景的な歌である。取つてゐるこの百首中の歌の例として六首中の一首を擧げると、

たゞいまの野原を己がものと見て心つよくも歸る秋かな  
のような抒情性の勝つたものばかりである。「初學百首」から天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけり  
の歌を取り、なおこれは「新勅撰集」にも取つてゐる。かういう歌は、むしろ「古今集」への逆轉を示すものである。

彼に取られなかつた歌で、注意されるものの中の少數を次に抜き出して見る。

(1) ふりにける庭の苦ちにはるくれて行方もしらぬ花のしらゆき  
(皇后宮大夫百首)

(2) 年ふれど心のはるはよそながらながめ馴れぬるあけぼのの空  
(閑居百首)

(3) まどろむとおもひも果てぬ夢路よりうつゝにつゝく初雁の聲

(同)

(4) こぼれぬる露をば袖にやどしおきて萩のはむすぶあきの夕風

(無動寺法印早卒露臍百首)

(5) 月きよみ四方の太空雲きえて千里のあきをうづむしらゆき

(重奉和早卒百首)

(6) 散りまがふ木のもとながらまどろめば櫻にむすぶ春の夜の夢

(花月百首)

(7) あれにけり軒のしたぐさ葉をしげみ昔しのぶのすゑの白つゆ

(十題百首)

(8) 風つらきもとあらのこ萩袖にみて更け行く夜半におもる白露

(歌合百首)

(9) 面影もわかれにかはる鐘のおとにならひ悲しきしのゝめの空

(同)

(10) 去年もさぞたうたうねの手枕にはかなくすぐる春の夜の夢

(韻歌百二十八首)

(11) あとふかきあがたつ袖に杉ふりてながめ涼しき鳩の湖 (同)

(12) 面影に戀ひつゝ待ちしさくら花さけば立ちそふ嶺のしらくも

(仁和寺宮五十首)

これらの歌は骨格がしつかりしていて、叙景のものも、身邊直寫の(3)(6)(9)(10)等も、艶麗を極めている。而も直情的な抒情性が稀薄な共通性を持つている。「新古今集」入集のものでも除かれ

た。  
霜まよふそらにしをれし雁が音のかへるつばさに春雨ぞ降る

(仁和寺宮五十首)

夕暮はいづれの雲のなごりとではなたちはなに風の吹くらむ

(同)

などもこの系統のものである。しかし、同じく「新古今集」入集のもので自歌合に取つた

旅人の袖ふきかへすあきかぜに夕日さびしき峯のかけはし (韻

歌二十八首)

太空は梅の匂ひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月 (仁和

寺宮五十首)

等も同じ系統のものと考えられる。この二首は「新古今集」の代表歌ともなるもので、出来映えも格別だが、「新古今集」入集作品であるという意識も強く働いたかとも思う。なお、「花月百首」中の

さくら花さきにし日より吉野山そらもひとつに薫るしら雪

かすみ立つ峯のさくらのあさばけ紅くゝる天の川波

櫛の戸は軒端の花のかげなれば牀もまくらも春のあけほの

などは華麗なもので、この種の歌では、自歌合に取つた年代的には最初のものである。だから、無下にこの種のものを却けたとは思われないが、「閑居百首」の例を擧げて見よう。

この百首では自歌合入集歌は、

(1) 山里の軒端のこずゑ雪きえてあまりなとちそ五月雨の空

(2) 霞ふるしづがさゝやよそよさらに一夜ばかりの夢をやは見る

(3) 浦風やはに波こす濱風のねにあらはれて鳴く千鳥かな

(4) 歸るさのものとや人の眺むらむ待つ夜ながらの有明の月 (新

古今集

(5) 世の中をおもひのきばの忍ぶ草いく世の宿も荒れかはてなむであつて、取られないものに次のような歌がある。

年ふれど心のはるはよそながらながめ馴れぬるあけぼのゝ空  
咲くと見し花の梢はほのかにてかすみぞにほふ夕ぐれのそら  
まどろむとおもひも果てぬ夢路よりうつゝにつゞく初雁の聲  
しきたへの枕ながるゝとこの上にせきとめがたく人ぞ戀しき

入集歌の(1)(2)(3)は叙景であつて取らなかつた歌と同じであるが、そこに相違がある。(1)は「あまりなとちそ」といい、(2)は一夜の夢も見られないという。(3)は「ねにあらはれて鳴く」といい内容が悲痛である。取らない歌の初め三首は美しい浪漫的な空想である。これはこの百首だけではない。「二見浦百首」では

見渡せば花ももみぢもなかりけり浦のとまやのあきの夕ぐれ  
(新古今集)

しぐれつるまやの軒端の程なきにやがてさし入る月の影かな  
(千載集)

を殊更取らないで、

山がつの身のためにうつ衣ゆゑ秋のあはれを手にかかすらむ  
たゞいまの野原を己がものと見て心つよくも歸る秋かな

等を取っている。これは抒情的であるとともに苦惱的な暗さがある。なお、自歌合中の多少の歌を次に引く。

いかにせむさらでうき世は慰まず頼みし月も涙落ちけり(皇后  
宮大夫百首)

なとり河いかにせむともまだ知らず思へ人を恨みけるかな

(無動寺法印早卒露贈)

春の夜は月の桂の匂ふらむ光に梅のいろはまがひぬ(重奉和早卒百首)

見ずしらぬうづもれぬ名のあとや誰たなびき渡る夕暮の空(十題百首)

昔だになほ古里のあさのつき知らずひかりのいくめぐりとも

(韻歌百二十八首)

櫻花うつりにけりなとばかりを歎きもあへずつもる春かな(仁和寺宮五十首)

これらはその一部分を引いただけであるが、「重奉和早卒百首」の歌のような叙景的なものでさえが、「古今集」の歌を本歌にとしての抒情脈を多くしている。叙景で華麗な、調べの浮き上つた歌の殆んどが取られず、生活的氣分を持つた歌でも、華麗な浪漫性を備えたものは取つていないことが知られる。

四

正治二年の「秋日侍太上皇百首」と建仁元年「夏日侍太上皇百首」(千五百番歌合)とはその百首自身が彼の生涯に意義を持つものであると同時に、前者は自歌合に十四首、後者は二十二首という最高の數を取っている點で特に注目すべきものである。その數から考えても、彼が生涯の中で特に重んずべき百首であると考えたに相違ない。そして、それまでの百首と比較すると、この二つのものは、艶麗浪漫的な青春の香いのする歌が殆んどない。「秋日百首」の「駒とめて袖うちらはらふかげもなし佐野のわたりの雪

の夕暮」は如何にも艶麗ではあるが、明朗ではなく、既に本歌の連想からも来るように内面に苦澁がただよっている。そして、それと同じ感味を持ちながらより抒情的である。

しのばじよわれふりすてゝ行く春のなごりやすらふ雨の夕暮は自歌合には取つていない。彼の歌は既に艶麗浪漫の青春時代を過ぎて、自歌合時代に近ずきつつあることを感ずる。この百首は初めから緊張した強い調べに貫かれてゐる。そして不審に思われるのは「梅の花にはひをうつす袖の上にのきもる月のかげぞあらそふ」の「新古今集」入集歌を取らないでその前後の歌を取り、花の香のかすめる月にあくがれて夢もさだかに見えぬ頃かなを取つてゐる。これは同じく花の香と月を扱つた歌で、比較の上でこれを取つたに相違ない。彼は描寫的でこれは抒情的である。勿論描寫的な歌も取つてゐるが、

片糸をよる／＼峯にともす火にあはずば鹿の身をもかへじを白妙の衣しでうつひゞきより置き迷ふ霜のいろに出づらむまつ人のこぬ夜のかげにおもなれて山のは出づる月も恨めしのような、「新古今集」の歌風としては相應しくない、またその集に入れても彼自身の特色を見せたものにはならない歌を取つてゐる。それは描寫によつて餘情と暗示を示すものではなく、直情的に言い下す氣力の強さを示すものである。これは先々の百首と共に選歌の一つの態度を示しているものではなからうか。

「夏目百首」の歌は總體的に調べがゆるんだものが多く、前の百首に比しては氣力が感じられない。これは建仁元年四十歳で、「明月記」に依ると多病な時代である。それと共に寫實的な詠法

から氣力で押す抒情歌に轉化しようとする過渡期で歌に迷いができたためではなからうか。ところが（一）建仁元年六月十三日にはこの百首を院が感服されたという通知を受けて感涙している。成程「新古今集」入集の（二）六首は彼の特色を極度に發揮したものであつて、自歌合にはその全部を取つてゐるが、それにも拘わらず、調べのゆるんだものが多く目につく。彼がこの百首から二十二首を取つたのは取るべき歌も多かつたのだが、彼としては院から稱揚されたという感銘も深かつたのであらう。ところで、この二十二首には華麗な描寫の歌はない。描寫であつても冷えさびたものか、抒情を混じえた描寫のものである。それと共に、調べの緩んだものは一首も含んでいない。もう一つ注意されることは十五首の戀歌の中から七首の歌を選んでおり、百首歌の中では、最高の率を示している。この戀歌では、劇的内容をもつものの全部を取つており、象徴性の色濃いものである。この百首は沈思したと「明月記」に記しているが、彼の努力の大半は戀歌に注がれたのではないかと思われる。この戀歌の方向は、大體が抒情性の強いものだけに彼としては年代的にもそれほどの食い違ひは感じなかつたであらう。

註（一）百首殊宜之由有御氣色之趣粗示之。日來沈思摧心肝、

今聞此事。心中甚涼刃感涙。生而遇斯時自愛難休。（建

仁元年六月十三日）

（二）櫻色の庭のはる風あともなし問はばぞ人の雪とだに見

む

久方のなかなる川のうがひ舟いかにちぎりてやみを待つ



らむ

秋とだに忘れむとおもふ月かけをさもあやにくにうつ衣かな

獨りぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまがふ牀のつきかげ

我が道をまもらば君をまもらむ齡はゆづれ住吉のまつ消え伦びぬうつるふ人の秋の色に身をこがらしのもりの白露

(3) 「内大臣家百首」では戀二十五首中十二首を取っている。然しこれは「寄名所戀」の種々相を考慮してもいるようだ。

## 五

建仁元年の「院五十首」以後の各集團の歌と、家集の部類歌から出た歌を最後に一括する。「最勝四天王院」四十六首中から抜いた歌は他の歌群から取つたものとは態度が違つていて、これは特に名所題書の歌ということを念頭においたためか、叙景的なものばかりを取つているので、これだけは除外すべきだと思う。又後に補修の「關白左大臣家百首」は餘りに時代を隔てているので問題外とする。

露おつる櫛の葉あらく吹く風やなみだあらそふ秋のゆふぐれ  
(院五十首)

露やおく宿かりそむる秋の月まだひとへなるうたゝねのそで  
(院句題五十首)

我ぞあらぬ驚さそふ花の香はいまも昔のはるのあけぼの(冬日同詠二十首)

これらは叙景的で、それぞれに艶な浪漫性を備えていて、取られていない。そして取られているのは、艶消しの、抒情性を含んだものばかりである。

部類歌から出た歌では、

櫻狩かすみのしたに今日暮れぬ一夜やどかせはるのやまびと

(健保元年内裏詩歌合)

なもしるし嶺のあらしも雪と降るやまさくら戸の曙のそら(内裏詩歌合・年代不明)

の二首だけが感情主義の美しさを見せているだけである。そして後の歌は「新勅撰集」に取つているものである。

はつせ山傾く月もほのぼのとかすみにもるゝかねのおとかな

(正治二年左大臣家歌合)

世の常の雲とは見えず山ざくら今朝やむかしのゆめの面かけ

(年代不明)

おきあかす野邊の假庵の袖の露おのがすみかと月ぞさえゆく

(建仁元年)

これらの歌も浪漫的美しさをもつた叙景脈の勝つた歌であつて取られないものである。同類の歌で取られているものは、

なはざりの小野の浅芽におく露も草葉にあまる秋のゆふぐれ

(正治四年)

夕づく日むかひの山の薄紅葉まだきさびしき秋のいろかな(建保二年)

の類で、平凡に見え、抒情性を含んだ、あまり印象的でない歌が多い。描寫脈を主にした複雑性を持った歌は多く取られていない。そうした「新古今集」風の一面を代表するものは、定家にはあまり好ましくなかったようである。

同じく戀の歌で考えられることは、抒情よりも戀の情景が思い浮べられるようなものは除かれているということである。「新古今集」に取り残れているその種のもは流石に捨てることができなかったようで、この歌合に取つてゐるが、次に擧げるものは、みな取らなかつたものである。

忘ればやはなに立ちまよふ春がすみそれかとばかり見えし曙

(建仁二年)

ゆくへなき宿はととへば涙のみさゝのわたりのむらさめの空

(同年)

やどり來し袂はゆめとばかりにあらばあふ夜のよその月影(承元四年)

この種のものと、自歌合に取つた次の二、三の歌と比較して見る。

逢ふことはしのぶの衣あはれなどまれなる色に亂れそめけむ

(建保四年)

來ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身も焦れつゝ

(同年)

やどりせし庵の萩の露ばかり消えなで袖の色に戀ひつゝ(住吉

歌合)

これらはいずれも抒情を主意として、その意力でいい下してい

る歌である。勿論この部類には「新古今集」入集の歌三首があつて、

白妙の袖のわかれに露おちて身にしむ色のあきかせぞ吹く(建仁二年・水無瀬十五首歌合)

咽ふともしらじな心かはらやに我のみけたぬ下のけぶりは(建

永元年)

の二首だけを自歌合に取つてゐる。この二つはともに、實景というものを感じさせるが、その強い感覺性と暗示性は純粹感情の自然化と感じられ、後の歌には「しらじな」の感情語が用いられて叙景でないことを思わせる。これらにある強い調べは、作者の感情の象徴であるために、物象は全く感情化されていると思われる。これを彼は意識したかどうか、自歌合に取つた歌の多くは、緊迫した調べのものを選んでいることが、取らなかつた歌と比較して見て知られる。これは、彼が抒情性を重んじて來た證據ではなからうかと思う。

以上の事を再び思い返して見ると、叙景脈の歌は僅かで、餘程の氣魄が感じられるものだけに限られ、青年時代の華麗な歌は殆んど捨てられ、燦ぶされた感覺を與えるもので、強く抒情されて魂のうめきを感じるものを多く選んでいると思われるのである。過去の作品を選ぶのであるから種々な様式の歌が混じえられてゐるが、全體を一貫するものはこれであり、選んだ時代の彼の理念が示されていると考えられる。

自歌合の選が行われた建保年間の百首では、三年の「内大臣家百首」から十六首取つてゐるが、十二首が「寄名所戀」のもので

特殊な技巧を使つたものであつて優れたものはない。歌そのものが平面的で説明的な抒情に墮している。同年「内裏百首」も名所ばかりの歌で、その中でも

あだ波のたかしの濱のそなれ松なれずばかりてわれ戀ひめやも  
のような抒情的な歌を選んでゐる。更に四年の「春日百首」は六首を選んでゐるが、

花の色にひと春まけよかへる雁ことし越路の空頼めして  
夜もすがら月に憂へて音をぞなく哀れにむかふ物思ふとて  
のように強く抒情した歌ばかりを取つてゐる。これは前時代の歌を選ぶ態度と矛盾しない。建保時代の定家はこの境地に作歌理念を置いたと見ても不當ではなからう。

### 國語學會公開講演會研究發表會

國語學會では第三十六回の公開講演會と第九回の研究發表會とを十一月十六日(土)・十七日(日)の二日間にわたり東京大學(法文經三十六號教室)で行つた。公開講演會は十七日(日)午後一時半から行われた。

一、尼門跡の言語生活と公家言語について 井之口有一氏

一、詩歌における音楽性について

時枝誠記氏

研究發表會は十六日と十七日の午前中との二日間にわたつて行われた。發表題目と發表者はそれぞれ次のとおりである。

一、「らむ」の意味について

尾崎知光氏

「らむ」の用法を統一的に考えて、その本質を「不明・不確實・非定・疑はしき・矛盾・不審などによつて一括される種類の事態」に對應する陳述をあらわすものと考えられている。

二、係結の性格

林田 明氏

要旨の一部を紹介すると「ぞ」は地の文、主として付き「なむ」は會話。「こそ」は地の文につくという。また「ぞ」は動詞に「なむ」も動詞に「こそ」は形容詞に主としてつくとされ、それら相互間の關係・意味を考えておられる。

三、色葉字類抄の「辭字」について

青木 孝氏

四、中古語・中世語における動詞相互の連結作用について

關 一雄氏

五、品詞分類への一試案

――語の表現性格とその系列分類――

徳田 政信氏

六、「不肯」の訓について

大坪 併治氏

七、アクセントの理解をばむもの

川上 泰氏

八、愛知縣方言における連母音の諸相

芥子川 律治氏

九、高松アクセントとその解釋

和田 實氏

一〇、ナメクデリとナメクジラ

長尾 勇氏

なお會が終つてから懇親會をもち午後五時解散した。

(杉本 つとむ)